

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

漂泊する華僑・華人新世代の越境

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4302

第12章

漂泊する華僑・華人新世代の越境

陳 天 璽

はじめに

華僑・華人を論じる際に、戴国輝¹⁾が「luoyeguigen 落葉帰根からluodishenggen 落地生根へ」と喩えたことはよく知られている。「華僑」の僑は仮住まいを意味し、海外に一時的に滞在する中国国籍保持者を指し、一方「華人」は、居住地など中国以外の国籍を取得した中国系の人を指している。中国国籍を有する華僑は、海外に移住してもいずれはルーツのある故郷に帰ると考えられ、「落葉帰根（葉が落ちて根に帰る）」と表された。しかし戴は、華僑はいずれ居住地の国籍を取得し「華人」となり、移住先の環境に適応し、そしてアイデンティティも、中国に対する一元的なものではなく移住先の文化に融合同化するであろうと「落地生根（葉が落ちてその地に根を生やす）」を唱えた。多くの華僑・華人研究者はこれに賛同し、また華僑・華人たちにも受け入れられてきた²⁾。

事実、現在多くの中国系移民は移住先の国籍を取得し、「落地生根」しているように見える。筆者が調査してきたアメリカや日本、そしてマレーシアなどの中国系移民もしかりである。しかし、最近の動向を注意深く観察していると、彼らの越境のダイナミズムは、「落葉帰根から落地生根へ」が表す中国から移住先への適応という一方向的かつ単純な構図では、もはやその真相をつかむことができなくなっているように思う。「落地生根」したかに見える華僑・華人の新世代たちが、「Where is Home? 何処是吾家」³⁾と問い

かけ、自分のアイデンティティの拠り所を模索している。また、一方では中国の急速な成長が外的要因として、彼らのトランスナショナルな活動を活発化させている。こうした動きを捉えるためには、「落葉帰根から落地生根」に代わる、新しい視点が必要になっていると思われる。

筆者は、そんな現在の華僑・華人の越境を「漂泊尋根piaoboxungenから処々扎根chuchuzhagenへ」と表現することによって、その真相をより適切かつわかりやすくすることができるのではないかと考える。

世界中に点在する華僑・華人たちは、複数の国家や文化の影響を受けているため、多元的なアイデンティティを有しており、所属の曖昧性ゆえ、ルーツ探し（「尋根xungen」）をしたいという思いに駆られることがある。一方では、複数の言語を話すなど、多文化を身につけているため、複数の環境を往来する機会が多いなか、どこにいてもマイノリティであることから、社会における自分の居場所を探し求めることがある。そうした、様子を「漂泊尋根」と表している。

一方、「処々扎根」は、直訳すれば「各地に根をはる」という意味である。華僑・華人がルーツ探しや居場所探しのために越境を続けるなか、各地に分散している家族や知人とのつながりが形成され、そうしたつながりから派生したビジネスや様々な活動の結果、各地に拠点を築き国境を越えた複数の基盤を持つようになることを表している。彼らは、結局、一つの強靱不拔なルーツを見つけるといよりも、国境を越えたネットワーク型のビジネス形態や家族形態を形成するようになり、トランスポーダーな生活空間で生きている。

先に触れた「落葉帰根から落地生根へ」という比喻に対して、「漂泊尋根から処々扎根へ」は、華僑・華人を葉に喩え、葉が落ち着くところを探すかのようにあちこちに漂泊していたのが、しまいには、落ちたその先々に根をはるというイメージである。前者が故郷に帰るか、もしくは、移住先に根を生やすかと、目的地が単一、かつ明確であるのに対し、筆者が新たに提起する後者は、拠り所とする先は明確ではなく、むしろいくつか縁のある地を行き来しているうちに、各地に居場所を見つけていく様子を表している。その姿は浮遊する落葉のように曖昧でつかみにくいものでもある。

そんな自分探しをする漂泊の旅路は、ディアスポラを経験した移民の宿命であるように思われる。しかし、彼らは旅を経て、結局一つのルーツにこだわるのではなく、むしろ多文化を内包している自己の特徴に気づき、それを生かした生き方が一番自分らしく、また自然なあり方であると認識するようになる。

本章では、華僑・華人の2世3世などの新世代に注目し、彼らが漂泊しながら自分探しすることを通し、その越境の旅や経験から人的ネットワークを築き、トランスナショナルな活動を展開している実態を、インタビューや参与観察によって収集した具体的なケースを通して明らかにしたい。まず、第I節では、華僑・華人の越境の歴史の変遷を概観する。そしてディアスポラ論による華僑・華人研究の意義を考える。次に第II節では、個々の華僑・華人に注目し、「漂泊尋根から処々扎根へ」と変わっていく彼らの越境形態を具体例より明らかにする。第III節では、華僑・華人組織の動きに注目する。具体的には世界華商大会を例にあげ、華人組織が、各地にすでにある華人コミュニティを利用し、より空間的に自由で、柔軟性のあるネットワークを築こうとしている様子を見てゆく。最後に、第IV節では、華僑・華人の越境形態がいかに変容しているのか、そして、彼らはなぜ再び越境するのかを分析する。

I 越境を続ける華僑・華人たち

1 華僑・華人の越境の歴史と変遷

華僑・華人を「越境の民」と喩えてもおかしくないほど、彼らの国境を越える移住の歴史は綿々と続いている。現在までの歴史を大まかに分けると、4つの時期に分類することができる。第1期は、19世紀半ばまでの長い歴史。第2期は、19世紀後半から1945年まで。第3期は、1945年から1970年代後半、第4期は、1970年代後半から現在までである。

華僑・華人の越境は古くまで遡ることができるが、ここでは宋代(960-1127年)や明の末期に触れたい。宋代に造船業が発達し、船に乗せて運ぶこ

とができる商品経済も飛躍的に発展し、民衆は海外に出て貿易することが奨励された。そのため、当時多くの中国商人たちが東南アジアに渡って貿易をしたと言われている。また、明代（1368-1644年）の初期は一時鎖国令がしかれ、海外との接触はなくなるが、末期になると再び中国の沿海を中心に外国人との貿易が展開された。19世紀半ばに至るまでの歴史において、すでに華僑・華人は越境を行い海外に居住しており、しかもアジアにおいてグローバルな通商ネットワークを有していた。

第2期、アヘン戦争（1840-1842年）を機に中国人の大量移住が本格化した。その背景には、中国内部の政治的混乱と経済的貧困が人々を国外へと押し出すプッシュ要因となった。一方、移出を促すプル要因としては、西洋諸国の奴隷制廃止と植民地における労働力の需要という事情があった。「苦力^{kuli}」とも呼ばれた中国系労働者が大量に発生し、彼らは後に東南アジアやアメリカなどの地において華僑・華人社会を形成していった。

第3期、第二次世界大戦の終結を境に、国際情勢は大きく変化し、新興国民国家の誕生と国家主義の台頭ともなっており、華僑・華人のアイデンティティが中国から居住国へと転化していった。多くの華僑たちは、中国の共産化により、故郷へ戻ることを断念し、居住国籍を取得するなど華人化が進んだ。

第4期の1970年代後半に入ると、国際情勢の緊迫状態は緩和され、国家間関係は緊密になり、相互依存の時代に入った。「独立自主」外交を掲げていた中国も、1979年から改革開放政策を推進した。一方、アジアでは経済の高度成長を背景に、華僑・華人資本が新しい展開を見せ、グローバルなネットワークを構築し注目を集めるようになった。

歴史を概観しても、華僑・華人の越境を促進する力には時代ごとにそれぞれプル要因とプッシュ要因があったことは言うまでもない。なお、プッシュ要因としては、大きく分けて3つの原因をあげることができる。第1に、政治的な原因による海外移住。つまり歴代王朝による迫害、中国国内における政治的混乱、そして民主化の要求など、統治者との政治的イデオロギーの不一致により海外に移住したケース。第2に、経済的困窮や自然環境の悪条件により生活が困難になり、出稼ぎを余儀なくされた者による海外移住。第3

表1 華僑・華人の越境とアイデンティティの歴史の変遷

時期	19世紀まで	19世紀後半から 1945年	1945～1970年 代後半	1970年代後半 以降
越境の推進力 Push & Pull	造船技術の発達 モノの交換	貧困・混乱 労働力の需要	中国の共産化 新興国家の成立	改革開放 グローバル化
越境形態	通商	出稼ぎ	移民・同化	一時的・契約的
アイデン ティティ	中華思想	中国 出身地	居住国への同化	トランス ナショナル
比喩	—	落葉帰根	落地生根	漂泊尋根 処々扎根

(注) 筆者作成

に、商人などが事業拡大や投資のために海外へ出て行ったケースである。一方、プル要因としては、外国における労働力の需要。そして、海外にいる親戚や知人などによる情報の提供や移民の勧誘などもあげられよう。

今日、華僑・華人は世界各国に分散し、その人口は、3千万とも4千万とも言われている。居住国の国籍を取得する者や現地の人との通婚が増えており、華僑・華人の正確な人口を把握することはきわめて困難である。一例として、台湾の僑務委員会が編集した『華僑経済年鑑』⁴⁾の統計データによると、華僑・華人の総人口は3487万人であり、世界約150カ国に居住している。あくまでも推計であるが、目安として人口と分布については同統計データをもとに図1に表してみた。なお、世界の華僑・華人の8割近くはアジアに集中しており、ついでアメリカに1割、そしてヨーロッパやアフリカ、オセアニアなどに分布している。

2 ディアスポラ論と華僑・華人研究

図1からも一目瞭然であるように、華僑・華人は世界各地に分布している。そして、チャイナタウンに代表されるように、彼らは各地にコミュニティを築いている。また、地縁や血縁などエスニックなつながりによる求心力を有していることから、ディアスポラと呼ばれるようになっていく。

ディアスポラ (diaspora) という語は、研究社新英和辞典によると、「離散ユダヤ人」や「ユダヤ人のパレスチナからの離散」と解釈されている。他

の辞典でもディアスポラは「散らされた者」や「離散して故郷パレスチナ以外の地に住むユダヤ人。また、その共同体」と記されている。このように、ディアスポラという言葉は、従来、ユダヤ人の離散を表す際に使われてきた。しかし、近年では、グローバル化にともなって人口の移動がより頻繁になると、ユダヤ人のみではなく、「ブラック・ディアスポラ」や「コリアン・ディアスポラ」など、様々な民族が移住し各地に点在している状態を表す際にも使われるようになってきている。

ディアスポラの語源をたどると、これはギリシャ語の「広める、蒔く、散らす」という動詞 *speiro* と前置詞 *dia* (*over*) から形成されている。ギリシャ語でこの語を人に用いる場合、それは移民や植民地化という意味を指すものとして考えられてきたようだ。ユダヤ人やアフリカ人、パレスチナ人、アルメニア人などにとって、ディアスポラは不吉で残酷な意味合いを持った言葉である。それは、追放されて故郷や祖国の外で生活をし、帰りたいところに帰れないという精神的外傷を共有している集団を指している。これに対し、近年は、国外追放や迫害を受けていなくとも、海外に移住し長い年月を経ても比較的強い集団のアイデンティティを継続的に保持している分散した民族集団をディアスポラと呼ぶようになってきている。こうした用法には、悲哀や感傷的な意味合いは含まれていない。

華僑・華人にディアスポラという用語が使われることについては、さまざまな意見がある。例えば、華僑・華人の移民史に精通している ^{Wang Gungwu} 王賡武 は、ユダヤ人に使用されたディアスポラという用語を華僑・華人にあてはめることに賛成していない。しかし、彼はディアスポリック (*diasporic*) な視点、つまり、民族が散在している現象や状態を研究することは、時代の趨勢からも大変重要であると考えている。

1998年末、ハーバード大学で行われた「チャイニーズ・ディアスポラ」と題するシンポジウムでも、華僑・華人をディアスポラと表すことについて、激しく議論が交わされた。反対派の意見としては、離散したユダヤ人を指すことに成り立ちを有するこの言葉は、聖書に出てくるように、迫害され聖なる地から追い出された民族を指しており、悲哀のイメージが強いこと。また、それは一元的な点から民族が離れて散らばることを意味するので、華

僑・華人には不適切だというものであった。

その理由として、第1に、華僑・華人の海外への移住は、必ずしも追放ではなく、多くの場合、より良い生活を求めて移住することを自ら選択している。つまり、華僑・華人の移住は受動的ではなく能動的なものであるという点があげられる。

第2に、ディアスポラは「^{lisan}離散」と訳されているが、分散するという遠心力だけではなく、共通のアイデンティティによって繋がるという求心力も持っているため、その訳語は「^{lisan}離散」ではなく「^{jusan}聚散」などのように、集まる意味合いを含めて表現されるべきではないかという意見である。また、近年の華僑・華人は故郷と移住先を往復したり、第三国などへの移動を続け、最終目的地がないまま移住を続ける傾向もあるため、「^{piaobo}漂泊」と表すのが適切であるという意見もあった。

一方、賛成派の意見としては、用語の起源が華僑・華人の移住に適していないのは理解するが、世界各地に拡散した移民の現象とそのネットワークをディアスポラとして分析するという視点は、華僑・華人研究にとって重要であるというものであった。そうすることによって、各居住国のケーススタディにとどまらず、比較研究やよりマクロな視点での研究を行うことができ、華僑・華人研究の発展に繋がるというものであった。

筆者もディアスポラの用語を華僑・華人に使うことには賛成しているが、ユダヤ人を指した悲哀なイメージとは切り離し、華僑・華人が点在している「現象」や「状態」を表すには適していると考え。そして、華僑・華人が故郷の内乱やより良い生活を求めるなどの理由で、様々な地域に押しだされ分散するというプッシュの力学とともに、共通するアイデンティティによって求心力を有するプルの力学を持った集団をイメージしている。また、華僑・華人の越境を考える際、その真相をより正確に捉えるためには、「漂泊」がディアスポラの訳語として最も適していると考えている。なぜなら、近年の華僑・華人たちは、最終目的地を定めないまま、複数の拠点を渡りあるき、時代の趨勢に合わせて移動を続けている。そうした浮遊した性格を表すのに「漂泊」は適している。また、後にケーススタディでも紹介するが、アイデンティティさがしをする新世代の移動を表すにも「漂泊」が適してい

る。

経済のグローバル化の進展において、ディアスポラは一定の影響力を有している。また経済だけではなく、現代社会を考える上でも、大切な視点であると思われる。トインビー (Arnold Toynbee) は、将来の潮流として、局地的な国民国家よりはむしろ、世界に広がったディアスポラが重要になるであろうと主張し、早い頃から彼の著書においてディアスポラの重要性を予期していた⁵⁾。20世紀が国家を主体とした歴史であっただけに、われわれは国家の枠組みで物事を見ることに慣れ親しんできた。世界システムにおける国家の枠組みの重要性を否定するつもりはないが、それとは異なったレベルや視点で世界を認識することも重要である。その際、ディアスポラは国家の前提であった地理的な要因を超えて、世界に散在した民族が類似した歴史的経験の共有によってつながりを形成するという、空間的により柔軟でダイナミックな存在であり、グローバル化している現代社会と今後の歴史的趨勢を捉える上でも大切な視点であると思われる。

華僑・華人を分析する際に多用されてきた「落葉帰根」や「落地生根」という比喻も、中国に帰るか、それとも居住国に根付くか、と国家の枠組みにとらわれてきたように思う。現在の華僑・華人の実態をつかむには、「漂泊尋根から処々扎根へ」というトランスナショナルな世界観に立った視点が求められている。

II ディアスポリックな家族形態

ここでは、フィールドワークや参与観察において、個々の華僑・華人に注目したケーススタディを通し、「漂泊尋根から処々扎根へ」と変わっていく彼らの越境形態を見てゆきたい。

1 「ホンクーバー」の「^{taikongren}太空人」

頻繁な越境により華僑・華人の家族形態はディアスポリックになっている。代表的な例では、香港返還が実施される1997年をひかえ、香港に居住する多くの華僑・華人が移住したことである。当時、返還後の生活がいかなる

ものになるのが予測不可能なため、家族の将来やリスク回避を考慮して、アメリカやカナダ、オーストラリアなど移民の受け入れに比較的寛容な国を目指し香港の人々は再移民した。特に、バンクーバーでは、1980年代より、香港からの移民が一気に増加し、「ホンクーバー (Hong Kong と Vancouver、それぞれの語頭と語尾をつなげて)」といわれるほどであった。

家族や将来の安全を考えて、バンクーバーへ移住した華僑・華人のなかには、新しいビジネスを築くことに成功した者もいる。しかし、実際成功したケースはむしろ稀であり、やはりビジネスの拠点は香港やアジアに置き、アジアでの蓄えや収益をカナダでの新ビジネスや生活の資金源としていることが多い。そのため、家族はカナダで生活をするが、稼ぎ頭は仕事のためにアジアに戻る必要があり、家族は離れて暮らすことが多くなった。こうした華僑・華人たちは、移住先とビジネスの拠点であるアジアを頻繁に移動するため、空を飛んでいる時間が長いことから、「^{taikongren}太空人」と比喩されている⁶⁾。

「^{taikong}太空」とは、中国語で宇宙を意味する。飛行機で空の上を頻繁に行き来しているディアスポリックな家族は、国境をも無化にし、宇宙飛行士のような未来感覚を持っているという意味が込められている。また、こうした華僑・華人家族を「太空」と表す際、その隠喩も見逃せない。それは、家族の生活や子孫の将来のため、頻繁に越境するという生活スタイルがとられているが、皮肉なことに、家族が離れて生活することが長期化することによって摩擦や誤解が生じ家族崩壊が発生している。こうした家族を「太空」と表すのは、世界を飛び回るといふ意味以外に、稼ぎ手(しばしば夫)が常に家を留守にするため家が空っぽで、妻(中国語では妻を^{taimai}太太といふ)の心が空虚、つまり「太空」な状態だといふ隠喩がある。

2 家族5人4カ国5カ所に帰る

(I) 台湾生まれ日本育ち

在日華人2世の黄さん一家⁷⁾は、ディアスポリックな家族の一ケースである。台湾に生まれた黄さんは、幼少期に両親の移住にともなって来日し、横浜中華街で育った。小学校、中学校は横浜中華学院で教育を受け、日本の高等学校を卒業後、台湾の大学に進学した。台湾生まれである黄さんにとっ

て、台湾での大学生生活は故郷に戻ったような懐かしい思いをとまなうものであった。なぜなら、彼女はそれまで日本において常に「外国人である」という意識があったからである。しかし、台湾に戻った後、彼女の日本との関係が生まれ故郷である台湾に劣らないものであることが明らかとなった。大学において、彼女は多くの人間関係があるなか、日本から留学生として台湾で学んでいた小川さんと知り合い交際することになった。黄さんにとって、生まれ故郷である台湾は日本よりも安心するところであったはずだが、そんな台湾に戻って、彼女がもっとも打ち解けられた相手は、日本に関する共通の話題を豊富に持つ日本人の小川さんだったのである。2人は8年の交際を経て結婚することとなった。

(2) 日本に帰る、台湾にも帰る

小川さんと黄さんは、結婚当初日本で家庭を築き3人の子どもに恵まれた。小川さんは台湾に留学していたこともあり、流暢な中国語を話し、台湾のことにも精通していた。日本の企業でしばらく働いたが、台湾で培った語学力とネットワークを生かそうと、いくらか資金をためると、台湾と日本を行き来し貿易を始めた。一方、妻の黄さんは日本で料理店を営む実家の手伝いをしながら子育てをしていた。80年代になると、台湾で日本語が流行したため、小川さんは日本語学校を開校した。この頃から、小川さんの生活は、ビジネスの基盤が台湾で、家族は日本という形態が定着する。小川さんは、2週間に一度日本にいる家族のもとに戻り、そして、黄さんと子どもたちは、子どもの学校が休みになると小川さんがいる台湾に帰るというトランスナショナルな家族生活をしてきた。小川さんにとって、日本は帰るところなので、台湾から家族のいる日本に戻る際は「回日本hui Riben（日本に帰る）」と言っている。一方、黄さんも、子どもをつれて小川さんに会いに台湾に渡るときも「回台湾hui Taiwan（台湾に帰る）」という。長期生活をしているのはあくまでも日本なので、「去台湾qu Taiwan（台湾に行く）」ではないのか？ という私の質問に対し、黄さんは、「家族や家があるので、回台湾というのは当然だ」といい、むしろ私の質問に違和感を持ったようだった。

(3) 次世代は国際的な舞台へ

国際結婚をした小川さんと黄さんにとって、家族が離れ離れで暮らすことは、寂しいものでもあったが、自分たちの生まれ育った環境や経歴が国を跨ぐゆえに仕方ないことであるとも思っている。また、子どもたちには、日中両方の言葉や文化を身につけて欲しい、そして国際的に活躍して欲しいと思っているため、春休みや夏休みに台湾に帰る度に中国語を学ばせ、また家族と一緒に過ごせるときは海外旅行をすることも多かった。

その影響もあってか、3人の子どもたちは高校や大学になるとそれぞれ留学を希望した。長女は英語と中国語両方を習得できるシンガポールへ、そして長男は高校時代からカナダに留学した。長女と長男がそれぞれ留学していた時期、黄さん一家は5人5カ所で暮らしていたようだ。次男は黄さんとともに日本で暮らしていたが、パイロットを目指し航空学校で学んでいたため、家を離れ金沢で寄宿生活をしていた。

家族5人4カ国5カ所に散らばっていたため、毎日顔を合わせるからこそなかったが、それぞれ国際電話で頻繁に連絡をとり合っていた。また、子どもたちは、「休みになると、台湾に帰ったり、日本に帰ったりしていた」という。

現在、長女と長男は留学を経て日本の大学で学んでいるが、2人と入れかわって、今は次男がカナダに留学している。そして、長男も大学の交換留学生として、2007年夏からアメリカへ再び留学している。「夏から1年間アメリカに留学した後、今度は中国に留学し中国語もブラッシュアップしたい」と語る。そして「将来は、国際金融の仕事に就きたい」という目標を持っている。一方、長女に家族のことを尋ねると、「小さいころは父が家を留守にすることが多く寂しいと思うこともあったけど、自分も留学を経験して感じたのは、物理的に一緒になくとも家族はどこかで繋がっているということ。そして、家族それぞれが自分のしたいことをしているので、こういう家族形態もいいのではないかなと思う。むしろ、どこにでも帰れる家があっていい面もある」という。そして、「自分は、シングルカルチャー（単一の文化）のなかで育っていないので、言葉や文化などを複数身につけ、それを生かして国際的な舞台で活躍したいと思う」と語った。実際、英語、日本語、中国語を

習得した彼女は、日本の大学で学びながらイギリスのファッション雑誌社の東京支社でインターンとして研修を受けており、大学卒業後はファッション関連の仕事に就き、世界各地で取材する将来像を描いている。

(4) さらに広がる家族の活動空間

一方、小川さんは、台湾で新たに始めたコンピューターソフト会社の製品開発を中国で行っているため、近年は台湾と日本の間だけではなく、中国にも頻繁に行くようになっていく。小川さんの活動範囲が広がっているばかりか、そんな家族のなかで育った子どもたちの生活空間はさらに拡大する傾向にある。子どもたちの世代で特徴的なのは、日本や中国など民族的出自や国の枠組みにしばられることなく、よりグローバルな舞台上でトランスナショナルな活動を選択していることである。彼らはそれが可能な知識と能力を身につける家族形態と基盤を有している。黄さん一家に見られるように、華僑・華人のディアスポリックな家族形態は、新世代の更なる越境によって、ますます拡散していきそうだ。

3 契約社員からトランスナショナルな企業家へ

(1) 「^{qiaosheng}僑生」そして「外国人」としての壁

日本で貿易会社を経営する華僑2世である徐さん⁸⁾は「帰化の申請をしようと思って計算してみたら、去年1年のうち、200日は日本にいなかった」そうだ。

徐さんは、中国本土出身の両親のもと、1950年代に台湾で生まれた。4歳のときに両親とともに来日した。日本の中学、高校を卒業した後、大学は「^{qiaosheng}僑生」（いわゆる帰国生）として台湾の大学に進学した。中国語は家で話していたし、小学校時代は両親と離れ、祖父と台湾で過ごしていたため、言葉の問題はなかった。しかし、中国語による高等教育はこのときが初めてだったうえ、台湾の大学の授業内容は思いのほか難しかった。難関の受験戦争を勝ち抜いてきた「^{bendisheng}本地生（現地出身の学生）」と仲良くなりノートを借りたり、勉強を教えてもらったりした。「自分のペースは本地生と違うので、いくら勉強しても理解できない科目もあった。そのかわり、カンニングの腕は

誰にも負けなかったね」と大学時代を振り返る。

勉強ではとうてい「本地生」にかなうはずがなかったが、部活ではバスケット部のキャプテンを務めた。マージャンの腕のほうでも名が通っていた。ノート借りや単位のとりにやすい授業の情報集めをしていたおかげで、大学内での人的ネットワークは人一倍強かった。そのため、徐さんが主催するダンスパーティーなどのイベントには人がたくさん集まり人気も高かった。「卒業単位取得には苦勞したし留年もした。でも、楽しい大学生活だった。あの頃の仲間といまも一緒に商売している」そうだ。

1980年代初め、台湾での大学生活を終え日本に戻った。日本はバブル経済が成長していた頃である。当時の日本の大手企業は、4月に一斉に新入社員を採用するという制度が定着しており、6月に卒業して日本に戻ってきた徐さんはタイミングを逃していた。しかも、履歴書の段階で名前や本籍の欄から「外国人」であることが一目瞭然である徐さんは、当時国籍条項が依然残っていたなか、日本の大手企業への就職は容易ではなかった。「日本に暮らし、日本で育ったが、日本にいるときは、外国人であり日本人とは違うのだという意識は当然ある」という。就職で違う扱いを受けても「仕方がない」と思っていた。

(2) 日本と中国の橋渡し役

なかなか就職も決まらないまま実家の貿易会社を手伝っていると、知り合いの紹介で、車のパーツを製造している某大手企業への就職の話が舞い込んできた。その会社は中国市場への進出を計画しており、中国語のできる人材を探していたのだ。当時、経済が自由化したばかりの中国と日本の間では、言葉はもちろんビジネス習慣など様々な面で違いがあった。相互理解をはかりビジネスを成功させるためには、双方の文化習慣や価値観を熟知する人による橋渡しが欠かせなかった。日本で育った華僑である徐さんは会社にとって、うってつけの存在だった。面接で即採用が決まった。しかし、正社員ではなく契約社員としてであった。

徐さんは、中国進出のプロジェクトを担当し、通訳などのため中国へ出張することが増えた。両親は中国大陸出身とはいえ、中国の共産化により故郷

を後にしてから一度も中国へは戻っておらず、家族のなかで徐さんが最初に新中国を訪れることになった。徐さんは台湾出身であり、家族は台湾政府が発行する中華民国パスポートを持っていた。中国へ渡航するためには、「台胞証^{taibaozheng}」という台湾同胞に与えられる特別の渡航証明とビザを取得する必要があった。

日本にいる間は、名前などから明らかに外国人と見られてきた。徐さん自身も、台湾出身とはいえ中国人としてのアイデンティティがあった。一方、中国では、中国語に長け中国名であるので同じ中国人として親近感を持たれるが、「台胞証」をもつ華僑である徐さんは、やはり「海外から来た人」として、様々な面で待遇が違ったようだ。彼が中国に行き始めた1980年頃は、旅費やホテル代、そして貨幣にいたるまで国内の人と海外から来た人でははっきり区別された。また彼自身も、「同じ中国人であるので、中国本土の人が考えていることは、ある程度理解できるが、やはり海外で育った自分たちとは価値観が違う」という。また、彼にとって日本と中国、どちらも身近であり理解することはできるが、それとは裏腹に、どちらも完全な自分の居場所ではないという思いがあるのも否めない事実であった。

(3) 漂泊から生まれるネットワーク

そんな思いを持ちながらも、頻繁に中国へ出張していた徐さんは、長年両親が連絡を取れずにいた親戚に会うことができた。また度を重ねるごとに友人や知り合いも増えていった。数年が過ぎると、中国の友人から独立して新たにビジネスをしないかという誘いが舞い込んできた。ビジネス内容は、電子機器のパーツを中国の四川省に輸出するというものであった。日本の会社のサラリーマン、しかも契約社員として働き続けることに少なからず不満と不安を感じていた徐さんは、いろいろ悩んだ末その誘いを受けることにした。オフィスもないまま、家の電話とファックスを使ってのスタートだった。「中国大陸の人とのビジネスは、どうしても会って食事したりお酒を飲んだりして交流を深め、信用を築き上げないとビジネスに繋がらない。」そのため徐さんは、中国と日本を頻繁に行き来し、月の半分は中国でホテル住まいをする生活を送るようになる。

数年後、ビジネスが軌道に乗ると、日本でもオフィスを構え従業員を雇うようになった。しかし、商談はどうしても自ら中国の顧客のところに出向かねばならなかった。また、ビジネスで中国と日本を行き来する途中、フライト経路の関係もあり台湾や香港を経由することが多かった。大学時代の友人や親戚が多いこと、そして彼が所属していた社会団体の活動に参加するという目的もあった。頻繁にアジアを飛び回ることによって、彼の人的ネットワークは自然に広がり、それによってビジネスチャンスが舞い込んでくることは多かった。例えば、台湾で参加していた団体で知り合った人とのネットワークがきっかけで、徐さんは台湾の化粧品ブランドの日本代理店を引き受けることになった。かつては電子機器のパーツだけを扱っていた会社の片隅に、化粧品担当のスタッフを配置するようになった。

一方、もともと手がけていた電子機器のパーツの輸出の事業に関しては、中国の急速な経済成長にともない注文量が増え、日本からの輸出だけでは追いつかなくなり、徐さんは中国に工場を建設することとなった。日本から技術者を送りこみ、中国でも生産を行い需要に 대응している。ビジネスが拡大した現在では、日本と四川、双方に家を有し、また社会団体の活動を通して知り合った台湾出身の女性と結婚したことで台湾にも家を持つようになっている。

(4) 国籍や国家とのドライな関係

徐さんは、自分の居場所が日本なのか、台湾なのか、そして中国なのか、いつも中途半端に感じていた。しかし、彼のそんな「どっちつかず」の立場ゆえ、国境を越えて活動することが増えたのも事実である。そして、彼はいつしか日本、中国、台湾いずれにも家を持ち、それぞれに自分の拠点を有している。まさに、「漂泊尋根から処々扎根へ」の具体的なケースと言える。それが、彼の今のトランスナショナルなビジネスの成功にも繋がっている。

徐さんは、2007年2月に日本の国籍を取得した。幼少期に日本に移り住み40数年経過して、ようやく手にした日本のパスポート。彼に日本国籍取得の理由を聞くと、「便利だから」と素っ気なく答えた。トランスナショナルに活動する徐さんにとって、国家との関係はきわめてドライだ。国籍やパスポートは、あくまでも越境のための道具と考えており、アイデンティティの証

明でないのは、彼の言動からも明らかである。

III トランスナショナルな華僑・華人コミュニティ

ここでは、華僑・華人組織の動きに注目する。具体的には世界華商大会を例にあげ、華人組織が、各地にすでにある華人コミュニティを利用し、トランスナショナルなネットワークを築こうとしている様子を見てゆく。なお、ここにあげるコミュニティとは、移住先で形成され同じエスニックグループ同士で組織した地域社会を指す。しかし、華僑・華人の場合、移動が多いこと、そして多元的なアイデンティティを有していることから、所属するコミュニティは、エスニックなそれに限らず多種多様であり、場合によっては地域やエスニシティにさえも縛られないコミュニティを形成することがある。世界華商大会は、「華商」という名がつけられているため、どうしてもエスニックな排他性を有しているように見られがちであるが、以下に紹介する実態を見てゆくと、実はきわめて柔軟で開放的なものであることがわかる。なぜなら、彼らが求めているのは、エスニックなつながりよりも経済的利潤であるからだ。

1 世界華商大会のトランスナショナル戦略

ディアスポラな基盤を利用し、トランスナショナルな活動に生かしているのは、家族や個人の企業家レベルにとどまらない。華僑・華人コミュニティの代表的な団体である中華総商会も、世界各地に点在する既存の団体を利用し、ネットワークを築き世界大会を開催するようになっている。

華僑・華人の多くが、海外において商業に従事していることから、コミュニティにおいて様々な商会在結成され、華僑・華人たちは、定期的に会合を開きビジネス情報を交換したり相互補助を行ってきた。同郷会、宗親会などは華僑・華人ネットワークの基幹組織として知られている。一方、商会は企業家の集まりであることから、資金調達力が高いだけでなく、共同の利益を追求する組織であるため、華僑・華人社会において共同事業の開発や様々な問題の処理を仲介するなど重要な役割を演じてきた。なかでも、中華総商会

表2 これまでの世界華商大会の開催実績

大会回数	開催時期	開催地	参加者	主賓（肩書は開催当時）
第1回	1991年8月	シンガポール	30カ国・地域より 750人	リー・クアンユー首相
第2回	1993年11月	香港	22カ国・地域より 850人	パッテン総督
第3回	1995年12月	バンコク	24カ国・地域より 1,500人	バンハン・シラバツイ首相
第4回	1997年8月	バンクーバー	30カ国・地域より 1,400人	クレイディアン首相
第5回	1999年10月	メルボルン	20カ国・地域より 800人	ハワード首相
第6回	2001年9月	南京	77カ国・地域より 4,700人	朱鎔基國務院総理
第7回	2003年7月	クアラルンプール	21カ国・地域より 3,500人	マハティール首相
第8回	2005年10月	ソウル	32カ国・地域より 3,000人	盧武鉉大統領
第9回	2007年9月	神戸・大阪	33カ国・地域より 3,600人	冬柴鉄三国土交通相

(注) 世界華商大会の報告書などをもとに筆者作成。

は、各組織の傘型組織として、現地の華僑・華人コミュニティを統合する機能を持ち、またビジネス以外の需要にも応え、コミュニティの代弁者としての役割も演じてきた。

移住先において政府の保護に頼ることができなかつた華僑・華人たちにとって中華総商会はコミュニティの支柱であったとも言える。1980年代頃まで、中華総商会は、各居住地の華僑・華人コミュニティの安定と発展のために寄与してきたが、1990年代以降は、グローバル化にともない、総商会の活動はトランスナショナルなスケールで大々的に行われるようになった。特に注目を浴びるようになった動きは、世界華商大会の開催である。

世界華商大会は、各国にある中華総商会の世界レベルの傘型組織として、それぞれの地域の中華総商会を組織し、2年に1度国際会議を開くというものである。国際会議には、世界各地からの代表団が参加し、中華総商会のメンバーやその関連のビジネスマンなど毎回数千人ほどが国境を越えて一堂に

会し、ビジネス情報を交換しネットワークを築く場である。1991年に、第1回大会がシンガポールで開催されたのを皮切りに、香港、バンコク、バンクーバー、メルボルン、南京、クアラルンプール、ソウルで開かれ、2007年9月は神戸・大阪で第9回大会が開催された。

2 広がるビジネスチャンス

1990年代初め、世界華商大会の旗揚げをしたシンガポール前首相のリー・クアンユーは、世界に散在しているマイノリティの例をあげ、「かつてマイノリティであることはハンディキャップであったが、このグローバル経済ではむしろ有利な条件である」⁹⁾と述べている。その裏づけとして、ジョエル・コトキン (Joel Kotkin) の『トライブス』¹⁰⁾の分析をあげ、海外に流出したマイノリティは強固な民族的アイデンティティ、互助、勤勉、儉約、教育や家族を重んじるなど、共通の価値観を有していること。そうした信念に基づいたネットワークや活動が、グローバル経済のなかで成功に導いていると述べた。そして、華商も「関係」¹¹⁾など独特な価値観を活用し、中国投資などビジネスの拡大を図るべきだと力説した。彼の発言には、マイノリティとして生きてきた華人ディアスポラがトランスナショナルなビジネス戦略のきっかけ作りの場として、世界華商大会を大いに活用してほしいという思いがこめられていた¹²⁾。

実際、世界華商大会での情報交換をきっかけに、話が進められたビジネスは多く存在する。例えば、1999年のメルボルン大会で韓国の代表団によって「仁川チャイナタウン構想」が宣伝されたが、その後、各国から人やカネが実際に仁川に流れ¹³⁾、また、チャイナタウンの再建や観光地化が進んだと報道されている¹⁴⁾。

また、2001年南京で開催された大会では、5千人近い参加者が集まった。インドネシアから参加していた華人3世である謝氏は、「この会議のため道路や町などを綺麗に整備しており、中国の経済発展の潜在力を感じさせられた。中国の人たちと協力したいという意欲が高まった」¹⁵⁾と語った。その数カ月後、謝氏は実際、中国で不動産投資を行った。それまでは、インドネシアを拠点に対ヨーロッパの貿易を手がけていたが、この頃から上海にも拠点

を作り、中国への投資を始めるようになった。

仁川チャイナタウンや謝氏のケースなど、世界華商大会のトランスナショナルな活動が、さらなる華僑・華人の越境、特にアジア間の越境を促進しているのが見逃せない。

3 日本での展開

近年の世界華商大会では、1970年代後半以降、中国から海外に渡ったいわゆる新華僑の活躍が目立っている。彼らは当然ながら、中国国内の事情に精通しており、各界とのパイプも太い。2007年の世界華商大会の日本誘致に成功したのも、老華僑だけではなく新華僑が果たした役割が大きいと見られている。

日本で開かれた第9回世界華商大会では、日本の各省庁などの協力をはじめ、全日空やトヨタなど多くの企業がオフィシャルスポンサーとなっている。日本の経済界が、成長する中国とネットワークを持つ華人資本家とのつながりを求めているのがわかる。しかし、日本の華僑・華人は人数の面でも経済力の面でも他の国の華僑・華人と比較すると小規模である。それは日本の管理と同化を主とした外国人政策と無縁ではない。今後、中国市場を背景に、トランスナショナルなビジネスネットワークを有する華僑・華人ビジネス人たちと、日本がどう付き合いしていくのか、注目が集まった。当初、出席を予定していた安倍晋三首相（当時）の突然の辞任が大会と重なり、代わって当時首相最有力候補と言われていた福田康夫よりビデオレターが贈られ、大会において放映された。安倍首相の代理として冬柴国土交通相が出席し、在日の華僑・華人が長年にわたり日本経済の発展に大きく貢献したと指摘し、日本民族と中華民族がともに、「和」の精神を発揮し、この大会が全世界の華僑・華人と日本人の相互理解と協力を促進するよう期待すると述べた。

ここに見られるように世界華商大会は、華僑・華人コミュニティを利用し、各地で大会を開催することにより、地域的により広い範囲での情報収集、ネットワークの構築を可能にしている。また、それだけではなく、各地の華僑・華人が現地国の人々との間で培ってきたネットワークをも取り入

れ、エスニックな壁を超えた繋がりを築き、ビジネスにつなげることを歓迎している。このように、組織レベルにおいても、各地に拠点を作る動きが見られる。まさに、「処々扎根」の一例といえよう。

IV 変容する華僑・華人の越境形態

技術の進歩や情報の流通により、人々の越境はより多様化し、活発になっている。地理的にも分散し、また、人々と国家や国境の関係が多様化しているように思われる。ここでは、そうした華僑・華人たちの越境形態の変容とその特徴をまとめてみたい。

1 国家との関係、そして移住形態

越境する華僑・華人たちの国家との関係は、かつての移民集団と比較すると契約的、一時的なものになっているのが特徴である。一つの目的地に移住したとしても、それは暫時的な移住であり、例えば移民権の獲得、短期的な出稼ぎや投資など、あらかじめ目的を定め、それに達すると、また故郷に戻って生活したり、新しい目的地へ移動するといったものである。かつてのように、移住先で骨を埋めるといった心構えで越境している者はむしろ稀であるように思われる。

移住形態を見ても、労働者や留学生、そして企業による派遣など、レベルも様々である。かつての華僑・華人の移民は、「苦力」に代表されるように、労働者として移住した人々が多数を占めたが、近年の華僑・華人の移民で目立つのは留学生など高等教育を受けることを目的として越境をしている人々、企業の派遣、もしくは企業家としてビジネスのために越境をしている人々である。もちろん、今日でも、労働者として出稼ぎを目的にした華僑・華人移民がいることは否めない。しかし、ほとんどが労働移民であったかつてと比べ、現在は留学、企業派遣、投資など、越境の方法が実に多様化している。

また、留学生はのちに、企業による派遣でさらに越境を続ける人々の予備軍となる。彼らに代表されるように、近年の越境者たちは、専門的な知識や

技術を持っていることが多く、また高等教育を受けるに足る比較的裕福な家庭の出身者であることが多い。そのため、進路に対する選択肢や機会にも恵まれている傾向がある。よって、越境形態も多種多様である。

2 4つのダイナミズム

なお、近年の華僑・華人たちの越境のダイナミズムを分類すると、以下の4つに分けることができる。

第1は、激増する新華僑である。改革開放（1979年）を境に、中国本土から多くの人々が留学や労働を目的に海外に流れた。彼らは「新華僑」と称され、それまでにすでに移住していた「老華僑」と区別される。日本でも新華僑が急増し、現在では日本における中国人口（約52万人『在留外国人統計』平成18年度版）の大多数を占めている。かつての老華僑の越境は、広東からアメリカ、上海から日本という、一つの目的地のみを目指した単純な労働移民の形態が主であった。そして、家族を呼び寄せ、居住国に根づくケースが多かった。しかし近年では、上海から日本に移住し、より良い機会があれば、さらにオーストラリアに再移住したり、場合によっては、故郷である中国に回流することもある¹⁶⁾。また、留学後日本で就職し定住したが、単に根づくのではなく、母語教育のため、子どもを中国に送り返し、親は仕事がある中国と日本を往復するなど、家族形態はよりダイナミックになっている。

第2は、再移民する東南アジア華僑・華人があげられる。特に、インドシナは政情が不安定であったことも影響し、多くの華僑・華人が難民としてアメリカやフランスをはじめとする国々に再移民した。欧米の国々のチャイナタウンにおいて、ベトナム料理店が軒を列ねていることや、アメリカでインドシナ出身者向けの華字新聞『越棉寮報』が発行されていることから、東南アジアから再移民する華僑・華人の動きを窺うことができる¹⁷⁾。また、マレーシア、インドネシア、フィリピンなど東南アジアの華僑・華人は、かつて居住地において華人排斥運動があったことや、「プミブトラ政策」など現地の人を優遇する政策があるため、子弟を海外に留学させ活動範囲を広げることで差別に対応した。子弟は留学後、現地にとどまり市民権や国籍を取得するなど、拠点を増やすことによってリスク対策も行っている。それが、フ

ファミリービジネスの拡大に繋がっているケースも見られる。

第3のダイナミズムは、中国への回帰である。これは、第1のグループである新華僑のみではなく、老華僑の新世代にも見られる動きである。まず、新華僑で、海外における勉強や貯金などの目的を達成した後、中国へ回帰する人は「海亀^{haigui}」と呼ばれている。中国語で、「亀」と「帰」が同じ「gui」という発音であることから、海外で留学や出稼ぎなど一定の目的を達成し、中国へ「帰る」人々は「海亀」と称された。

一方、老華僑の新世代の間でも、中国に回帰する現象が起きている。筆者はアメリカの華僑・華人のこうしたグループを「新金山をもとめるABC」と呼んでいる¹⁸⁾。アメリカのサンフランシスコは中国語で「旧金山^{jiujinshan}」と呼ばれている。19世紀半ばゴールドラッシュの時期に、多くの華僑1世が一攫千金を夢見て海外に渡る際の目的地としてサンフランシスコは「金の山」と名づけられたのだろう。老華僑たちは、故郷に錦を飾ることを願っていた人も多かったが、2度の世界大戦、そして地理的に遠かったなどの理由から故郷に戻ることを諦め、アメリカに根を下ろした。そうした老華僑1世たちの子弟で、アメリカに生まれた世代「ABC (America Born Chinese)」は、中国語より英語を得意とすることからも「ABC」と呼ばれている。アメリカで育ち高等教育を受けた世代が、ビジネスチャンスを探求めて、中国やアジアに逆流するという動きが出ている。彼らは祖父や父たちがかつて一攫千金を求めて「旧金山 (サンフランシスコ)」を目指して西へ海を渡ったように、一世を経て、今度は彼らが中国系であることやMBAなどの専門知識を持つという背景を生かし、成長する中国やアジアの市場で、より良いビジネスチャンスとやりがいを探求めて回帰している。彼らにとって、中国はまさに「新金山 (New Gold Mountain)」¹⁹⁾なのだ。中国の経済が著しい発展を遂げるなか、中国に回帰しビジネスチャンスを探求め、頻繁に居住地と中国を行き来するという越境形態は、アメリカの「ABC」に限らず、東南アジアや日本、韓国などの華僑・華人にも共通して見られる現象である。

最後に触れたいのは、組織レベルでのトランスナショナルな活動である。華人ディアスポラの基盤を活用し、各地に拠点を作りネットワークを広げているケースである。個人や企業レベルでは、企業家などがビジネスの拡大、

リスク分散、コスト削減のために行っており、組織レベルでは、華僑・華人団体がトランスナショナルなネットワークを築き、活動空間を広げている。すでに触れた世界華商大会はその代表的な例であり、そのほかにも世界各地の獅子舞のグループが一堂に会して交流・競技をする「シンガポール広南文芸武術大会」、春節のお祝いを29都市で巡回公演する「全世界華人新年祝賀祭」などが新しい動きとして注目される。これまで、同郷会や宗親会など華僑・華人組織は、居住国のコミュニティ内での活動に終始していたが、近年は各国のコミュニティとネットワークを築き、それをもとに越境した組織活動を行っており、脱領域的なコミュニティの構築がなされている。

3 なぜ再び越境するのか？

近年の華僑・華人の越境のダイナミズムを4つのタイプに分類した。ミクロレベル、つまり個人に焦点を当ててみても、中国本土からの新移民、移民した先から再移民をする人々、中国に回帰する人々、既存のコミュニティを拠点にトランスナショナルな活動をする組織など、華僑・華人たちの越境が、「中国から移住先へ」という一方向ではなく、多方向に向けて行われているのがわかる。

華僑・華人の新世代は、なぜ、再び越境するようになったのであろうか？華僑・華人2世3世にあたる新世代が有する特徴に留意し、その理由を考えると、以下のように整理することができる。

まず第1に、マクロな環境として、中国の著しい経済的な発展があげられる。中国の広大な市場はビジネスチャンスに満ちており、多くの投資家をひきつけている。華僑・華人の2世3世たちなどは、海外で生まれ育ちながらも中国系としてエスニックなつながりを有している立場を存分に活用しようという意識から、中国へ回帰し、頻繁に越境するようになっている。

第2に、華僑・華人の2世3世は、幼少期に家族とともに移住した者や移住先で出生した世代にあたる。よって、居住国の文化と両親の故郷の文化など、多文化に接触する環境に日常的に身を置いており、複数の言語や文化を身につけている者が多い。そのため、国際的な舞台での活動を望むものが多く、またその方が自分に適していると考え、そうした意識が彼らを再度越境

に促す要因となっている。

第3に、単に語学力や文化習慣だけではなく、アイデンティティの面でも、2世3世は1カ国に帰属するのではなく、多面的な帰属意識を有しているのが常である。多面的アイデンティティを有している際、プラスの作用を生み出すこともあるが、必ずしもそうとは限らない。しばしば、どっちつかずで「半端モノ」とされ、差別されることもあれば、複数の文化や国家のはざままで葛藤することも多い。そのため、「Where is Home?」と自分探しのために両親の故郷に回帰する者もいれば、国々の「はざま」からの解放を求めて第三国に渡ったり、各国を漂泊する者もいる。

第4に、移民家族に育ち、祖父母や親戚に会うためなど海外に渡航する機会が多いため、越境に対する抵抗感は比較的低い。また、親戚や知人、さらには華人ディアスポラによって形成されたコミュニティの基盤があることも、彼らが越境するに際して生まれるコストやリスクを低くさせている。

第5に、居住国においてマイノリティとしての立場を経験しているため、差別や権利獲得に敏感である。リスクマネジメントの一手段として教育を重視しており、華僑・華人は子弟を留学させることが多い。海外での高等教育を通じて、語学力だけでなく専門知識も習得し国際的な競争力を身につけさせている。また、留学後帰国するだけでなく、場合によっては留学先や職についた先で市民権や国籍を取得することも視野に入れている。

以上のような様々な要因が、華僑・華人を再び越境へと促す力となっている。そして、こうした華僑・華人の越境の特徴は、移民するため、言葉を変えれば新しい永住地へ移るためではない。それよりもむしろ、トランスボーダーな活動空間が、移民の子弟として育った背景を持つ彼らに、もっとも適しているからなのである。

おわりに

1991年より隔年のペースで世界華商大会を開催している中華総商会のトランスナショナルな活動が典型的な例であるが、かつて華僑・華人たちは、マイノリティとしてどの政府の保護も受けられないなか、コミュニティで自助

組織を構築した。それが、いまでは、各地にある組織を基盤に、同じエスニックなアイデンティティを有するディアスポラな仲間のネットワークを利用し、ビジネスをはじめとする様々な活動に発展している。

組織レベルの動きだけでなく、個々の華僑・華人たちの動きもダイナミックだ。かつては、故郷から移住先へと単線的、一方向的な越境が主であったが、近年の華僑・華人の越境形態は、複雑化しており、最終目的地がどこになるのかがわからないまま漂泊している感すらある。

特に2世3世の華僑・華人新世代たちは、生まれ育った地においても、そしてルーツがあるとされる中国においてもマイノリティとしての立場を余儀なくされ、「一体自分は何者なのか？」と自分に問いかけていた。しかし、より心が落ち着くところ、より自分の能力やバックグラウンドが生かせるところを求めて、国境を越えて移動している。そんな華僑・華人たちの間で、あらたな家族形態や越境形態が形成されている。根無し草のように漂泊しているとも見られるが、なかには行った先々で見出した多文化を有する自己の存在価値、漂泊の間に築いたネットワークや情報をもとにトランスナショナルな活動を行い、あちこちに自分の拠点をはりめぐらせ、どこにでも帰る場所を持つようになっていく。

こうした漂泊する華僑・華人新世代たちは、いくつかの利点と欠点を有している。利点としては、複数の地を往来するため、それぞれの地の情報を入手しやすいこと。また、それぞれの地の特徴や欠点などを知り、ビジネスにつなげるアイディアと機会を多く有していること。移動が多いため、各地では柔軟性が求められ、比較的ネットワークを広げやすい立場にあること。国家から比較的自由的な立場にあり、政治経済の変動にいち早く対応できることなどである。一方、彼らが有する欠点としては、浮遊したイメージがあり、帰属がはっきりしないこと。そのため、国家システムのなかでは排除されやすいこと。そして、頻繁な移動にともなう時間的・経済的コスト、そして家族の精神的な負担などがあげられよう。

また、彼らと国家の関係も興味深い。漂泊する華僑・華人たちのアイデンティティが拠り所とするのは、国家や民族、コミュニティよりも、むしろ家族や仕事などより個人的なものになっている。国境の存在に対する意識もき

わめて低く、グローバル化や技術の発展も拍車をかけ、彼らの越境は頻繁化している。そんな彼らの実態が、「Where is Home?」という自問よりも、むしろ近年では「Home everywhere」の実践につながっているように思われる。華僑・華人を「^{luoyeguijen}落葉帰根から^{luodishenggen}落地生根へ」と国家の枠組みを前提にして表すのではなく、むしろ「^{piaoboxungen}漂泊尋根から^{chuchuzhagen}処々扎根へ」とトランスナショナルな視点で見てゆかねば、ダイナミックに動く華僑・華人の新世代の越境の実態を正確に捉えることはできないだろう。

注

- 1) 戴国輝『華僑——「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』研文出版、1980年。戴国輝『もっと知りたい華僑』弘文堂、1991年。
- 2) 例えば、神戸華僑歴史博物館の入り口には「落葉生根」の書が展示されている(2007年3月現在)、また『落地生根』と題する書物も多数出版されている。中華会館編『落地生根——神戸華僑と神阪中華義荘』研文出版、2000年。饒尚東『落地生根——海外華人問題研究文集』砂羅越華族文化協会叢書、1995年など。
- 3) 1998年ごろ、ニューヨーク・チャイナタウンにある在米華人博物館(The Museum of Chinese in America 略称 MoCA)の展示。博物館の入り口に大きな世界地図を掲げ「Where is Home? 何処是吾家」と問いかけていた。
- 4) 『華僑経済年鑑1999年版』台北：僑務委員会、2000年。
- 5) Arnold Toynbee, *A Study of History*, 12vol. London: Oxford University Press, 1961.
- 6) 陳国貴「失根・尋根・重根」『明報月刊』1999年9月号、16-19頁。
- 7) 2006年10-12月、黄さんの家族に、それぞれ数回にわたりインタビュー。なお、本章にあげる人名はいずれも仮名である。
- 8) 2006年8-9月、2007年3月、数回にわたり徐さんにインタビュー。
- 9) 香港中華総商会『第二回世界華商大会記念特刊』1993年。
- 10) Joel Kotkin, *Tribes: How Race, Religion, and Identity Determine Success in the New Global Economy*, New York: Random House, 1993.
- 11) 人的つながり、コネクションの意。
- 12) 当初、政治を越え国境を跨いで連携する華僑・華人のネットワークに対し、「エスニックな色彩を色濃く持つ排他性を有した集団が、アジア太平洋経済を動かそうとしている」などというイメージが浮上し、成長著しい中国経済と一体になって「大中華経済圏」を形成するであろうという「中国脅威論」にまで発展した。
- 13) より詳しくは、陳天璽『華人ディアスポラ』明石書店、2001年、248-250頁を参照されたい。

- 14) Jeffery Miller, "Chinatown in Incheon Enjoys Renaissance", *The Korea Times*, 05-08-2005. <http://times.hankooki.com/lpage/special/200505/kt2005050816430567670.htm> (アクセス2007年3月20日)
- 15) 2002年7月マレーシア・クアラルンプールにてインタビュー。
- 16) 中国に戻るケースは増えており、「Uターン現象」、「海亀 haigui (海帰)」とも言われている。
- 17) 吉原和男「多様な中国系アメリカ人」『アジア遊学——特集 移民のエスニシティと活力』No. 39、勉誠出版、2002年、5-18頁。
- 18) 陳天璽「台湾系華人移民」『アジア遊学——特集 移民のエスニシティと活力』No. 39、勉誠出版、2002年、19-35頁。
- 19) Larry Wang, *New Gold Mountain*, New York: Mass Market Paperback, 1998.

参考文献と解題

戴国輝『華僑——「落葉掃根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』研文出版、1980年。

——日本における華僑・華人研究の代表的な著書の一つである。主に華僑・華人のアイデンティティに注目している。華僑に関する「東洋のユダヤ人」説など、民族による結束が強いとされるイメージがあるなか、戴は、華僑は移住にともないアイデンティティも融合・同化、つまり華人化していると分析している。

陳天璽『華人ディアスポラ』明石書店、2001年。

——インタビュー調査をもとに、国境を越えて活動する華商のアイデンティティとネットワークを分析している。自然現象である虹をメタファーに用い、華商の多様なアイデンティティと、それから派生する多様なネットワークを明らかにしている。また、グローバル社会における華商の存在と役割に対する新しい視座を提示している。

樋泉克夫『華僑烈々——大中華圏を動かす覇者たち』新潮社、2006年。

——華人企業家に注目し、その人脈、金脈、ビジネス哲学、錬金術、ものの考え方、価値観などを大量の情報をもとに分析している。華人企業家は、高度経済成長に沸く中国本土と、台湾、香港、マカオを経済的に融合させ、「大中華圏」を出現させる原動力となっていると説いている。

Aihwa Ong, *Flexible Citizenship—the Cultural Logics of Transnationality*, London: Duke University Press, 1999.

——トランスナショナルリズムの文化人類学的研究の代表的な著書。グローバル化によって頻繁化している国境を越えるヒトやカネ、情報の移動だけではなく、文化やアイデンティティの非領土化にも注目している。